

学会ニュース

目次

・第36回大会について	1
・2013年度国際18世紀学会執行委員会報告	小田部胤久	2
・東アジア交流～韓国18世紀学会秋季大会報告	玉田敦子	3
・ディドロ展覧会評	川島慶子	5
・ディドロ国際シンポジウムに参加して	逸見龍生	6
・事務局より	8

第36回大会について

来年度の第36回大会は2014年6月21日（土）、22日（日）の両日、福山市立大学で開かれる予定です。開催校責任者は堀田誠三会員です。

本大会では共通論題が2題開催される予定です。初日は開催校提案の「18世紀の海の道（仮）」で、コーディネーターは高橋博巳会員です。2日目は「啓蒙とフィクション」で、コーディネーターは斉藤渉会員です。

自由論題公募要領

第36回大会で発表を希望される会員は、1000字以内の発表要旨をつけて、**2014年3月7日（金）**までに学会事務局まで郵便かメールでお申し込みください。郵送の場合は要旨のプリントアウト原稿および電子ファイル（「ワード」形式で作成されたもの）の両方をお送りください。メールの場合は、要旨を添付ファイル（「ワード」形式）またはメール本文にコピーしてお送りください。

発表は1件につき50分、うち報告が40分、質疑応答が10分の予定ですが、申込者が多数の場合は、個々の発表の時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野のバランスなどを勘案して、幹事会で調整ないし選考させていただくこともありますので、この点はあらかじめご了承くださいませようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっています。

詳細はプログラムが決定され次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

2013年度国際18世紀学会執行委員会報告

小田部胤久（国際学会執行委員・東京大学）

2013年8月27日（火）にロッテルダム・エラスムス大学にて、国際18世紀学会（以下 ISECS と略す）の執行委員会が開かれた。後日ISECSの事務局より詳細な議事録が日本18世紀学会事務局に送られてくる予定なので、以下ではごく簡単に、特に日本の会員に関わる事柄に即して、議事を報告する。

まず、マルク・アンドレ会長による開会の挨拶があり、次いで前回委員会の議事録が承認され、さらにアンヌ＝マリ・メ事務局長及びバイロン・ウェルズ財務担当委員より、この一年間会務が問題なく行われたとの報告がなされた。

次に2015年の第14回ロッテルダム大会組織委員会より、大会の準備が順調になされている旨の報告があった。大会はエラスムス大学を会場に、2015年7月26日から31日まで開催される。大会の中心主題は、ロッテルダムという都市の性格に因んで、「通商」である。現在全体講演を行う人を選んでいる最中であり、会議では各全体講演のあとにその主題に関わるラウンド・テーブルが開かれ、それぞれの講演の主題についてさらに議論を深める、とのことである。組織委員会の案内で執行委員全員が会場を回ったが、施設がよく整っており、分科会も滞りなく行われるであろうことが予想できた。

2019年の第15回大会はエディンバラ大学で7月14日から19日まで開かれることとなった。通常よりも早い時期に開催されるのは、エディンバラ・フェスティバルとの重複を避けるためであり、参加費は250ユーロ以下に抑えたい、との報告がなされた。

新たな national society を ISECS のメンバーとして認めることは学会の活性化にとって不可欠である。今回は The Southeast Asia Society for Eighteenth-Century Studies (SA-SECS) の加入の是非が議題となった。「東南アジア」と銘打っているものの、実際には（都市国家である）シンガポールの研究者による学会であるため、果たしてこの名称がふさわしいのかどうか、議論された。アジアからの唯一の参加者として私も意見を求められ、national society のほかに regional society を承認することはアジアの場合さまざまな問題を含みうるが、東アジアの研究者の交流を盛んにするという点で、SA-SECS の承認には意味があるろう、と述べた。結局、賛成多数で加入が認められた。

2015年は執行委員の選挙の年に当たるが、ハンス＝ユルゲン・リューゼブリンク副会長が被選挙人名簿作成担当の委員として、被選挙人名簿（案）を提示した。名簿作成に当たっては、第一に、執行委員は3期を超えて委員となることができない、という選挙規則に鑑み、経験のある人と未経験の人のバランスを考慮し、第二に、会員1000人を超える大きな学会（例えばアメリカの学会）からは3名以上、500人程度の中規模の学会（例えばドイツや日本の学会）からは2名の候補者を被選挙人とするよう心がけた、とのことである。

若手セミナー（旧東西セミナー）に関してはすでに2017年まで開催予定地が決まっている（2013年はドイツ・ゴータ、14年は連合王国・マンチェスター、15年はオランダ・ロッテルダム、16年はブルガリア・ソフィア、17年はフランス・パリ）。「開催地が西に片寄っているのではないか」という質問に対しては、「ケベックで行ったこともあるのではないか」という反論が提起された。こうしたやりとりを見ても、西洋の研究者にとって所詮〈東洋〉は視野に入っていないことがわかる。私は個人的に（このセミナーのOBとして）、若手セミナーを日本で開くことには（とりわけ若手研究者の国際化という点で）多くの意義があるのではないかと考えているが、18年にはギリシアの学会が候補地として名乗りを上げ、また19年は大会の年であるため大会開催地のエディンバラが同時に若手セミナーの会場となるので、若手セミナーが近い将来に〈東洋〉で開かれる可能性はほとんどゼロであり、またそうしたことが求められることもまずありえない、と思われる。

次回の執行委員会はブルガリア・ソフィアにおいて8月26日に開催される。

なお、途中でエラスムス大学長より次のような歓迎の挨拶があった。——エラスムス大学は今年で

開学から100年目を迎える。本学は、当時の特にドイツの経済的発展を目の当たりにして、それに匹敵しうる通商をロッテルダム市に可能にすることを目的として設立されたが、戦後には医学部、社会学部も設けられ、総合大学として発展しており、現在の大学評価では世界で第75番目に位置する。100年目の記念すべき年に国際18世紀学会執行委員会の場を提供し、また2年後には第14回国際18世紀学会大会の会場として世界からすぐれた研究者をお迎えできることは大変光栄である。——学長の挨拶にまでランキングの話題が出てくるのには驚かされるが、これがご時世なのであろう。

最後に一言、2年後に国際大会に参加されるであろう日本の会員に向けて、旅の感想を付け加えることにしたい。今回の執行委員会に際して、エラスムス大学の事務局からは、大学協のノヴォテルに宿泊することが推奨された。2年後の国際会議の際には、若手研究者の便宜を払って、大学構内の学生寮も開放されるとのことである。だが、大学周辺は食事をするところがほとんどないため、夕食を取るためには結局都市の中心部に出ざるをえない。ブラク駅あるいはブルス（証券取引所）駅の周辺が繁華街であり、そのあたりに宿を取るのも便利であろう（大学からは地下鉄でそれぞれ4駅目と5駅目）。ブラク駅のそばにはピエト・ブロムの設計したキューブ・ハウスもある。ただし、ロッテルダムの中心地は第二次世界大戦で壊滅的な破壊を受けたため、風情は余り感じられない。これに対して、ブルスからさらに西に4駅のデルフスハーフェンのあたりは17世紀の街並みを伝える。ここは1620年にピルグリム・ファーザーズが出帆した港である。あるいは、ブルスから1駅南のルーフェハーフェンで降り、駅から南西のマース川に面した地区を歩くと、18世紀に建てられた海運事務所を改装したホテル・カルティエ・デュ・ポールなど、歴史的な建造物も目にすることができる。また、マース川の岸辺に立ち南を望むと、中州にはニューヨーク行きの出国手続事務所を改装したホテル・ニューヨークも見え、ホテルにはそこから海上タクシーで行くこともできる。宿をどこに取るかによって、ロッテルダムは全く異なった姿を私たちに見せてくれるはずである。

東アジア交流～韓国18世紀学会秋季大会報告

玉田敦子（中部大学）

2013年10月19日、ソウル市内の成均館大学において、韓国18世紀学会秋季大会が開催された。テーマは「18世紀の庭園」、日本18世紀学会からは、代表幹事の長尾伸一会員が参加するとともに、安西信一会員と玉田が招待講演をした。

午後の学会に先立って、19日の午前には、国立文化財研究所自然文化財研究室長、ジョ・ウンヨン先生のガイドで世界遺産の昌徳宮にご案内いただいた。秋のソウルの澄み切った青空のもと、冷たい空気に刻々と色づく樹々の緑に包まれながら、尽きない談笑に花が咲く至福の時であった。ジョ先生には、特別に、宮殿の一番奥に位置する非公開の庭園、「秘苑」にまでご案内いただいた。ソウルという巨大でエネルギーな都市の中心に秘められた、限りなく静かな庭のたたずまいには心を打つものがあり、まさに韓国文化の真髄に触れる思いであった。

午後、アン・デフェ会長の基調講演から始まった大会では、総計5名の発表者が報告をおこなった。それぞれの報告の内容については、以下のプログラムを参照されたい。後半の「総合討論」においては、「庭園」が視覚的なイメージとして提示する18世紀固有の様々な表象がなぜこの時代に現れたのかという問題が焦点となるなど、今後、両学会で検討していくべき課題も提起され、実り多い議論となった。

朝の庭園の散歩の余韻が残る中、18世紀における各国の庭園について考えるという美しい企画により、「花階」、「方池」といった韓国の庭園に特徴的な造形に対する理解が深まると同時に、庭園の喜びを文字通り五感で堪能することができた。この素晴らしい大会について特記しておきたいのが、韓国ならではの美食による歓待である。散歩の後に供された芳醇なワインとモダンなフランス料理を味わいつつ、韓国もまた、ヨーロッパとの文化交流をとおして洗練を重ねてきた国であることをあらためて感じた。夜は、午後に学会会場に入るやいなや、旧知のディドロ研究者、イ・ヨンモック先生が駆け寄って予告してくれたとおり、伝統料理「サムギョプサル」の専門店で膝を交えつつ、今後の両学会の交流、また共同での出版などについてもじっくり語り合うことができた。

最後に、この日まで会長を務められ、両国の18世紀学会の交流にもご貢献いただいたアン・デフェ会長、新会長のイ・ヨンチョル会長には心より感謝を申し上げたい。なお、原稿をあらかじめ翻訳し、論集としてまとめてくださった上、当日は極めて専門的な内容から些細な疑問まで厭わずに通訳をしてくださった金時徳氏の存在は、専門的かつ親密な両学会の学術的交流の継続にとって欠かすことのできないものである。この場を借りてあらためて深く御礼申し上げる。

日 時：2013年10月19日

場 所：成均館大学（ソウル市内）

主 催：韓国18世紀学会、成均館東アジア学院BK21プラス東アジア学融合事業団

後 援：NHN（株）、Munhakdongne

【プログラム】

基調講演：アン・デフェ（成均館大学）

司会：チョン・ビョンソル（ソウル大学）

<報告者>

- ・ジョン・ギホ（成均館大学）：「韓国伝統庭園の花階と方池」
- ・安西伸一（東京大学）：「農業と美の不／協和—18世紀イギリス風景式庭園の基調低音」
- ・ジョ・ウンヨン（国立文化財研究所自然文化財研究室長）：「東闕図から見た18世紀朝鮮の宮殿風景」
- ・玉田敦子（中部大学）：「近代フランス修辞学と庭園」
- ・ユ・スンヨン（韓国芸術総合学校）：「18世紀の中国揚州の塩商人と庭園文化」

<総合討論>

- ・ミン・ウンギョン（ソウル大学・イギリス文学）
- ・イ・ジョングァン（成均館大学・フランス哲学）
- ・イ・ジョンムク（ソウル大学・韓国古典文学）

ディドロ展覧会評

川島慶子（名古屋工業大学）

“La plume et le pinceau

Hommage à Denis Diderot, critique d’art (1713-1784)”

（羽と筆－美術批評家、ドゥニ・ディドロに敬意を表して）

Musée des beaux-arts de Rennes

（レンヌ美術館）

2013年2月6日－4月28日

「羽（羽ペン、つまり書くこと）と筆（描くこと）」と題されたこの展覧会は、ディドロの美術批評と、彼が評した画家の作品を併置することで、18世紀美術の一断面を生き生きと現出させた。これはディドロ生誕300年を記念した行事の一つとして、フランス、ブルターニュ地方の中心都市レンヌにある、レンヌ美術館で催された、小規模ではあるが濃密でユニークな展覧会である。パンフレットの表紙にはディドロが愛したシャルダンの静物画が、裏表紙には羽ペンと筆でXの字を作ったイラストが描かれており、このふたつの芸術がかなでるハーモニーの妙を象徴している。

ディドロの美術批評は、18世紀のフランスにおいて、王立絵画・彫刻アカデミーが隔年で開催していた、ルーブル宮殿でのサロンと呼ばれる展覧会について書かれた『美術展覧会（サロン）批評』を中心に、じつにディドロの最晩年まで続いた仕事である。この批評を始める前に、ディドロはすでに『百科全書』第二巻（1752）で項目「美」を執筆している。ここからもわかるが、彼は若いころから一貫して美や芸術という主題について考え続けた。ディドロの美学については、本学会会員の鷺見洋一、井田尚氏が監修し、つい最近出版された『ディドロ著作集4. 美学・美術』（法政大学出版局、2013）や、やはり会員である野口栄子氏の『ディドロと美の真実』（昭和堂、2003）などに詳しい。

レンヌ美術館では、当美術館所蔵のものから、ディドロが特に賞賛したシャルダン、グルーズらの絵画や、ヴェルネの絵を版画化した作品などを展示し、その横にディドロの批評を掲示して、このフィロゾフの視点からこれら18世紀の画家たちの作品を鑑賞できるようになっている。しかもこの展覧会は特設会場ではなく、常設展示の中にあるので、鑑賞者は18世紀以前、あるいはそれ以降の絵画も見ることができるから、18世紀絵画の特徴や、ディドロの先見性なども同時に感じ取ることができ、長いタイムスパンで、フランス美術の流れについて理解できる。展覧会の構成は以下のようになっている。

1. ディドロとシャルダン
2. ディドロとグルーズ
3. レシピエとバシュリエ
4. 歴史画と風俗画
5. 絵画の下絵
6. ディドロとヴェルネ、海の詩
7. 版画
8. 技巧
9. 彫刻

この中で特に興味深かったのは、「下絵」の価値についてのディドロのサロン評（1767）と共に、ヴァンサンによる大作の下絵を展示していることや、ディドロがけなしたレシピエの作品も、その酷評とともに展示してあったことである。ただし本展はあくまでレンヌ美術館所蔵の作品だけで構成され

ているので、作者はともかく、作品については、それが必ずしもディドロその人が見たものとは限らない。しかし、ディドロがその画家について何が言いたかったのかを知ることは十分可能である。

ディドロはこの時代の常識だった絵画のランク付け—宗教画や神話、歴史を主題にしたものを上位におき、日常風景や自然の情景、静物画などを下位におく—を完全に無視し、こうしたものに長けていたシャルダンやヴェルネたちの価値を高らかに謳い上げた。絵画・彫刻アカデミーでの芸術家の地位は、まさに先の主題別に決められていたにもかかわらず、ディドロは自分自身の美意識のみを基準とし、美術批評というジャンルを切り開いたのである。それは同時に、項目順ではなく、アルファベット順で『百科全書』を編集した啓蒙の精神と連動している。ディドロは天上や過去ではなく、今を生活している人間の生活こそが大切だと訴えたのだ。本展では、4のところでブーシェやドワイヤンらの歴史画、宗教画と共に、この主題についてのディドロの『絵画論』の文章を提示し、こうした芸術の分断のおろかさを、哲学者本人の「羽」で語らせている。じっさい、ここにある絵をみると、日常的な主題を描いた1や2の絵画が、4の絵画に劣っているという定義は、いかにもばかばかしい感じがしてくる。

多少主題とはずれるが、ジェンダーの視点から一言追加させてもらえるならば、先のアカデミーの価値観ゆえに、女性画家たちは長きにわたって低い地位にとどめ置かれた。というのも、男性の裸体デッサンを禁じられていた女性画家たちは、その技量がどれほど高くとも、男性の裸が必須である歴史画や宗教画（ミケランジェロの絵画などを想像していただきたい）を描くことができなかったからである。ディドロが女性画家の問題についてどう考えていたのかは知らないが、彼の視線はまた、「日常」に閉じ込められていた女性画家たちの多くが描いた主題に脚光を当てる契機ともなったのである。ちなみに、レンヌ美術館の至宝は、ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの「生誕」（1648—51ころ）である。要するに聖母子だ。しかし本展につれていってくれたブルターニュ出身の友人は「これはライック（非宗教的）な絵だよ。だって頭の輪っかがないもの」と私に言った。たしかに輪っかはない。しかも雰囲気はおごそかだが、非常につつましくて親しみやすい印象を与える。それこそディドロ的に言えば「自然な」絵画である。そういえばディドロは、サロン批評の中でブーシェの装飾的な聖母子を激しく批判している。自然ではあるが、同時におごそかな雰囲気のある聖母子を至宝とする美術館で、無神論者のディドロを記念した展覧会—しかもブルターニュはかつてカトリック陣営の牙城だった—が催されたことに、私はなんだか不思議な気分になったのである。

ディドロ国際シンポジウムに参加して

逸見龍生（新潟大学）

2013年はディドロ生誕300周年であった。1年を通じ、ディドロを巡るシンポジウムや学術会議が世界各地で、開催された。私自身も、鷺見洋一、小関武史両会員ともに参加した3月のパリでの『百科全書』シンポジウムから、12月にソウルで開催されたディドロ・シンポジウムにいたるまで、7回におよび海外でディドロについて発表する機会をえた。

これらの機会を通じ、多くの交流と出会いがあったのは幸いであった。私だけではなく、様々のシンポに参加した会員たちもみなそう感じているはずである。以下に書くのは、そのようなシンポジウムのひとつで知己を得た、イタリアの研究者との交流のエピソードである。

11月7日・8日の2日間にわたり、パリで開催された、マリー・レカ＝ツィオミス教授（パリ・ナンテール大学）、およびアン・トムソン教授（フィレンツェ・ヨーロッパ大学）主宰によるシンポジウ

ム「ディドロと政治」は、思想家ディドロをめぐる議論としては、テキストの校訂のレベルも含め、これまで比較的研究の立ち遅れていた政治思想に関する最新の知見を報告する、きわめて充実したシンポジウムのひとつであった。日本からは王寺賢太会員が参加し、『両インド史』（現在、大津真作訳で法政大学出版局から同書の翻訳が進んでいる）を中心とする堂々たる発表を行った。

王寺会員の発表と同様、このシンポジウムでは特に『両インド史』に関して総じて優れた発表が多かった。その他にも、アリストレスの国家論から始めたジョルジュ・ベンレカッサ教授のディドロ論は圧巻で、今回の白眉であった。この小文では、自分の現在の関心との近さという意味で、ナポリ東洋語大学教授ジロラモ・インブルーリアGirolamo Imbrugliaの発表にぜひ触れておきたい。先日来日したジャンルイジ・ゴッジ教授の盟友である。「偶像崇拜と供儀：宗教・政治論のための二つの基礎概念」というタイトル。啓蒙における歴史記述の問題と、その宗教・政治論の交叉を議論の中核に位置づけるものである。

インブルーリア教授の議論はおおむね以下のようなものであった。「偶像崇拜」（異教）に対抗する形で、「供儀」（キリスト教の玄義であり、かつ同時に異教もこれを行う）をいかに護教論的に位置づけるか。この問題は、17世紀末のカルヴィニズムやカトリック等で闘わされた神学政治論の文脈、とくにそのなかでも「批評史」にかかわる基軸のひとつであった。ディドロにおいてもこの問題はやはりなお重要なものとして存続し、なおかつ独特に転位していく。アルナルド・モミリアーノの高名な「古代史と古代趣味」論文を引き、ディドロの政治思想の理解において、17世紀以来の古代趣味の学識者の歴史をめぐる知的系譜との対峙がいかに重要な意味を持つのかをシャープに論じきったもので、刺激的であった。

同様の問題をここ数年間考えているところなので、かれの周到な議論に思わず膝を打った。ただ、会場の反応を見ると、やや見当違いな質問がでるなどして、その議論がうまく受けとめられていたかは、疑問が残る。

国際シンポジウムでのランチタイムは、議論の継続にちょうどよい機会だ。発表者、参加者が集い、学内の教員用レストランにて昼食を取る。席のやや遠かったランチを終えて、会場に戻る道でインブルーリア教授にかれの発表の感想を伝えたところ、望外に喜んでくれた。シンポジウムに参加したフランス側の研究者は主に文学の専門家が多い。政治思想史を専門とするかれはやや残念そうに「だれもモミリアーノを読んでいないようです」と苦笑する。モミリアーノの主著は仏訳もされていて、さすがにそのそのようなことはあるまい。昼食後のくつろいだ時間の一流のジョークなのだろう。だが、その一方で、フランスでは、哲学、文学、歴史のあいだの垣根が、学際性が重視されるはずの18世紀研究においても意外なほど高い。インブルーリア教授の言葉はあながち誇張とも言えないかも知れない。

2日後にマリー・レカ教授の主催する『百科全書』セミナーで報告することになっていた自分の研究の内容も話す。すると、驚いたことに、インブルーリア教授はわざわざ当日のセミナーに現れて、寺田元一会員や、パリやグルノーブルから来てくれた日本からの留学生に混じり、報告を熱心に聞いてくれた。発表の後に、18世紀初期におけるジュネーヴでのカルヴィニズムとソッチーニ派の動向について、貴重なコメントをしてくださった。実に嬉しく、励みになった。新しい出会いが私たちのネットワークをまた広げさせてくれた。

おそらくこのような交流と出会いを可能にしてくれるものこそが、国際シンポジウムの歓びのひとつなのであろう。思えば、日仏を中心とする『百科全書』国際共同校訂版研究もまた、モンペリエでの国際18世紀学会において、鷺見洋一会員をコーディネーターにして日本側が行った発表が、その起点となった。日韓18世紀研究者との国際交流の進展もまた、同じ国際学会を機会に力を寄せ合ったシンポジウムの結実である。日本でもぜひそのような機会をいつか創り出すことができれば。ディドロ生誕300年を振り返りつつ、そのように願っている。



事務局より

事務局移転及び振替口座変更のお知らせ及び、会費納入のお願い

昨年6月の大会をもって事務局が移転いたしました。新しい住所等はニュース末尾に掲載しております。お問い合わせ等は新事務局までお願いいたします。

また学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。事務局移転に伴い、郵便振替口座も変更となりました。今後は以下の振込口座へ会費の納入をお願いいたします。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

国際18世紀学会主催 国際若手セミナー開催情報

2014年9月8日～12日まで、イギリス・マンチェスターにおいて国際18世紀学会主催の国際若手セミナーが開催されます。このセミナーの申し込み締め切りは2014年3月14日です。詳しくは国際18世紀学会ホームページを御覧ください。（*日本事務局は受付先ではありません。ご注意下さい。）

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにした論文以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版ではRépertoireという項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者（Pascal Bastien: admin@isecs.org）に連絡してください。（英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。）

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方については、日本18世紀学会事務局から国際18世紀学会のサイト管理責任者にお名前だけ知らせてあります。そのような事情で、お名前はすでに記載されているはずで、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、公表したいデータを登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（上記サイトの画面上部のISECS-directまたはRépertoireボタンから名簿にアクセスできます。）

※※名簿データ変更の必要がなくても、国際学会のサイトをご覧ください。国際学会に関する情報のほか、シンポジウムなど各種の情報が掲載されています。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限ります。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

寄付のお願い

前号以来、以下の方から寄付がありました。お礼申し上げます。

礪山 雅	10口	10,000円
計	10口	10,000円

また寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。振り込みの際は学会口座が新しくなっておりますのでご注意ください。

学会への献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

・サン・ピエール（本田裕志 訳）『永久平和論』1巻（603頁）・2巻（462頁）、京都大学学術出版会、2013年

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしくご願ひいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお昨年9月より、新しいメーリングリストを稼働しております。これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順): 安西信一、王寺賢太(国際幹事)、大石和欣(常任幹事)、大野誠(常任幹事)、隠岐さや香、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、小関武史(常任幹事、年報担当)、斉藤涉、坂本貴志(常任幹事、年報担当)、武田将明、玉田敦子(常任幹事)、寺田元一(東アジア交流担当)、長尾伸一(代表幹事)、馬場朗、逸見龍生(常任幹事、年報担当)、増田真

会計監査: 安室可奈子、真部清孝

日本18世紀学会ニュース 第74号 2014年2月発行
発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一
事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局
e-mail: jsecs.nagoya.uni@gmail.com
tel: 052-789-2380
fax: 052-789-4924
<http://www.gakkai.ac/jsecs/>